

妊娠カレンダー

小川洋子



After; Fruit and Vegetables with parrot. Johann Waltheof, c.1650

妊娠カレンダー

小川洋子

妊娠カレンダー

一九九一年二月二十五日第一刷
一九九一年十一月五日第十四刷

著者紹介

昭和三十七年岡山県に生まれる。
早稲田大学第一文学部文芸科卒業。
昭和六十三年「揚羽蝶が壊れる
時」で第七回海燕新人文学賞を受
け、文筆活動に入る。「完璧な病
室」、「ダイヴィング・プール」、
「冷めない紅茶」、そして「妊娠カ
レンダー」と、発表する作品が連
続四度芥川賞候補となり、本作品
で第一〇四回芥川賞を受賞する。

著者 小川 洋子

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)三二六五一一二二

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

定価は、カバーに、表示されています
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

妊娠カレンダー 5

ドミトリイ 73

夕暮れの給食室と雨のプール

妊娠カレンダー

装幀 山本容子
口絵撮影 林朋彦

妊娠カレンダー

十二月二十九日（月）

姉がM病院に行った。

彼女は二階堂先生の所以外、ほとんど病院に掛かったことがないので、出かける前はかなり不安がっていた。「どんな洋服を着て行けばいいのか、全然分らないわ」とか、「初対面の医者の前で、うまく喋れるかしら」などと愚図々々言っているうちに、とうとう年末最後の診察日になってしまった。今朝になっても、

「基礎体温のグラフは、いったい何カ月分くらい見せたいのかしらねえ」

と言いながらぼんやりわたしを見上げ、朝食の残ったテーブルからなかなか立とうとしなかった。

「あるだけ全部見せたらいいんじゃないの」

とわたしは答えると、姉は

「全部といたら丸二年分、二十四枚もあるのよ」

と高い声を出して、ヨーグルトのびんに突っ込んだスプーンをぐるぐるかき回した。

「そのうち妊娠に関係ある部分はほんの数日分なんだから、わたしは今月の一枚だけを見せればいいと思っているの」

「だって、もったいないじゃないの。せっかく二年も計ったんだから」

「医者がわたしの目の前で、二十四枚ものグラフ用紙をがさがさめくっている場面を思い浮かべると、みじめな気持ちになるの。妊娠に至るまでの手順を、いちいちのぞき見されてるみたいで」

姉はスプーンの先についたヨーグルトを眺めた。それは不透明に白く光りながら、ところとスプーンからこぼれ落ちた。

「考えすぎよ。基礎体温表なんて、ただの資料じゃないの」

わたしはそう言いながら、ヨーグルトのびんの蓋を閉めて冷蔵庫にしまった。

結局姉は、全部の基礎体温表を持って行く決心をした。しかし、そのグラフ用紙を二十

四枚そろえるのが、また大変だった。

姉はあれだけ几帳面に毎朝体温を計っているが、何故かグラフ用紙の整理だけはいい加減だった。寝室にあるはずのグラフ用紙が、いつの間にかマガジンラックの中や電話台の上に紛れ込んでいた。普段の生活のなかでふと、折れ線グラフのぎざぎざ模様が目に入ることがあった。考えてみれば、新聞をめくったり電話をかけたたりしながら、「ああ、この日が姉さんの排卵日だったのね」とか、「この月は低温期が長いわ」などと思ったりするのは、やはり奇妙なことだ。

姉は部屋のアチコチを捜し回り、何とか二十四枚のグラフ用紙をかき集めた。

姉がM病院を選んだのは、感情的な理由からだった。わたしはもっと設備の整った大きな病院がいいと勧めたが、彼女は

「わたし、子供の頃から、赤ん坊を生むならM病院にしようって、決めてたの」と言っただけだった。

M病院はわたしたちの祖父の代からそこにある、産婦人科の個人病院だった。わたしはちがよく、その中庭に忍び込んで遊んだ。病院は古い木造の三階建てで、表から見ると苔の生えた塀や消えかかった看板の文字や曇ったガラスのせいで陰気臭いの、裏から中

庭に入るとそこにはたっぷりと日が差し込んでいて明るかった。そのコントラストが、いつもわたしたちをどきどきさせた。

中庭はよく手入れされた芝生が敷き詰められ、わたしたちはその上をごろごろ転がって遊んだ。芝の尖った葉先の緑と、太陽の光のきらめきが順番に視界を覆った。そしてだんだん緑ときらめきが目の奥の方で混じり合い、澄んだ藍色になっていく。すると空や風や地面がわたしの身体からすうっと遠のいて、宙を揺らめいているような一瞬が訪れる。わたしはその一瞬をとっても愛していた。

しかし何よりわたしたちを一番夢中にさせた遊びは、病院の中をのぞくことだった。わたしたちは庭の隅に捨ててあるガーゼや脱脂綿の段ボール箱を台にして、窓から診察室のぞいた。

「見つかったらきつと、怒られるよ」

姉よりわたしの方が臆病だった。

「大丈夫。わたしたちまだ子供なんだから、そうひどく怒られたりしないわよ」

姉は息で曇ったガラスをブラウスの袖口でぬぐいながら、平然とそう言った。

窓に顔を近付けると、白いペンキのにおいがした。鼻の奥がほんのり痛むようなそのに

おいは、M病院と強く結びついて、大人になってもなかなか消えなかった。ペンキのにおいをかぐと必ず、M病院を思い出した。

午後の診療が始まる前の診察室はひっそりと人影がなく、隅から隅までゆっくり眺めることができた。

楕円形のトレーにのった、さまざまな種類の広口びんは、特に神秘的だった。王冠でもねじ式でもない、ただガラスの蓋を差し込むだけのそのびんを、自分で開けてみたくて仕方なかった。びんにはどれも茶色や紫やえんじのくすんだ色がついていて、中の液体もそれと同じ色に染まっていた。太陽の光がびんに当たると、液体が震えるようにひそやかに透けて見えた。

先生が坐る机の上には、聴診器やピンセットや血圧計が無造作に置いてあった。その細くくねった管や、鈍い銀色の光や、洋梨型のゴム袋は、なまめかしい昆虫のようだった。カルテに書き込まれたアルファベットの続け文字には、ぞくぞくする秘密めいた美しさがあった。

机の横には飾り気のない、質素なベッドがあった。洗い晒しのごわごわしたシートが広がり、箱型の枕が真ん中にぽつんと置いてあった。その不思議な形の固そうな枕に頭を横

たえたら、どんな気分になるのだろうと、わたしは思った。

壁には『逆子を治すためのポーズ』という写真が貼ってあった。黒いタイツをはいた女の人が、腰を折り曲げ胸を床に押し当てていた。そのタイツがあまりにもぴったりと足に張り付いていたので、わたしには彼女が裸のように見えた。彼女は黄ばんだポスターの中で、うつろに遠くを見ていた。

どこからか学校のチャイムが流れてくると、そろそろ午後の診療が始まる時間だった。お昼ご飯をすませた看護婦たちの足音が扉の向こうに聞こえると、わたしたちはもうあきらめなければいけなかった。

「ねえ、二階と三階はどうなってるの？」

わたしが尋ねると、姉はまるで見てきたかのようにきつぱりと、
「入院用の病室や赤ん坊の部屋や給食室があるのよ」

と答えた。

時々三階の窓から、女の人が外を見ていることがあった。赤ん坊を生んだばかりの人だったのだろう。彼女たちはみんなお化粧つ氣がなく、厚手のガウンを着て、髪を一つに束ねていた。耳の横で後れ毛が弱々しく揺れていた。彼女たちはだいたい無表情で、ぼんや

りしていた。

『あんな魅惑的な物にあふれた診察室の真上に寝泊りできるのに、どうしてちっともうれしそうじゃないのだろう』

と、わたしはあの時思った。

どうしてもM病院で診察してもらうと言うくらいだから、姉にとっても子供の頃の印象は強烈だったのだろう。彼女もガウンを着て髪を束ね、ひんやりと青ざめた頬で、あの三階の窓から芝生を見下ろすことになるのだろうか。

わたしさえ折れば、姉に反対する人はいない。義兄は、「あそこなら近くて歩いて通えるし、いいと思うよ」と、いつものことながら当たり障りのない意見を述べた。

姉は昼前に帰ってきた。アルバイトに出かけようとしていたわたしと、ちょうど玄関で一緒になった。

「どうだった？」

「二カ月の半ば。ちょうど六週め」

「まあ、そんなに厳密に分るの？」

「こつこつためたグラフ用紙のおかげ」

姉はそう言うのと、コートを脱ぎながらずんずん家の奥へ入っていった。特別な感慨があるようには見えなかった。

「今日の夕食なあに？」

「ブイヤベース」

「あっそう」

「イカとあさりが安かったから」

そんなありふれた会話を交わした後のような、あっさりした感触が残らなかった。だからわたしは、おめでとう、というのさえ忘れていた。

しかし本当に、姉と義兄の間に子供が生まれるということが、おめでたいのだろうか。

わたしは辞書で『おめでとう』という言葉を引きしてみた。——御目出度う（感）祝いのあいさつの言葉——とあった。

「それ自体には、何の意味もないのね」

とわたしはつぶやいて、全然おめでたくない雰囲気漢字の漢字が並んだその一行を、指でなぞった。